知床世界自然遺産化による観光スタイル変容の功罪
～個人型観光は持続的か～

The sightseeing style change of the Shiretoko National Park,
by listing up to World Natural Heritage Site

藤崎達也*
TATSUYA,Fujisaki

あらまし
２００５年７月に北海道の知床は日本国内で３番目の世界自然遺産として登録された。筆者はステレオタイプで言われているような「一過性のブーム」「エコツーリズムの浸透」などと言った知床の世界遺産化に関する言説に対して、現地でエコツアー会社を営んでいた経験から違和感を持っている。この論文では、当時の旅行者の観光スタイルの変化を深く掘り下げ、世界自然遺産化や現状のエコツーリズムの流れが、必ずしも持続可能とは言えない現状を明らかにするものである。

キーワード：世界遺産　エコツーリズム　観光学　World Natural Heritage　Eco Tourism

1．はじめに

知床が世界遺産として登録されてから８年となる。筆者は知床が世界遺産になる前の１９９８年から斜里町ウトロを拠点としてNPO知床ナチュラリスト協会を設立しエコツーリズムの推進を行ってきた。当初は「エコツーリズム」などという概念が一般的ではなかったことから、ネイチャーガイドサービスや、着地型の観光スタイルなどを業界内外に理解してもらうだけで一苦労であった。しかし、旅行者の自然や地域を深く体験したいと言う潜在的なニーズは高く、立ち上げから数年で年間３万人もの観光客の対応をする事業へと成長したことからも伺える。特に、流氷ウォークなどはそれまでタブーとされてきた流氷の上でのトレッキングをドライスーツなどの安全装備などにより可能にし、今では流氷観光の目玉の一つに成長した。

これらは、筆者のアイデアというよりも、潜在的な市場があったことによるところが大きく、図らずも２００５年に世界自然遺産として知床の自然が世界的に注目され、海外の遺産地域では一般的だったガイドツアーにも関心が寄せられたことが成長の大きな要因と考える。

このように、一見エコツーリズムにとっては追い風のように思える世界自然遺産化であっても、登録前から観光産業や旅行者の動向を見ていていると、世間で言われる「一過性のブーム」「観光客が増えて自然破壊」といったステレオタイプな取り上げ方だけでは明らかにできない、より現実的な課題があるのではないかと考えるようになった。今一度、世界遺産化により増加した観光客の行動変容や、それによる機会損失の実態を明らかにし、それらの知見を共有するこ

*稚内北星学園大学

とによって、国立公園の管理や世界遺産地域での地域づくりなどに活用してもらいたいと思う。特に、メディアなどで煽動される「世界遺産化により観光客が増え自然が荒らされる」といった単純な論点や、少人数制のツアーが自然や地域の文化経済と共存するエコツーリズムの理想的な姿であるとする考察は、時には逆効果になりかねないということをこの論文を通してご理解いただけたらと思う。誰もが信じる″エコな姿″が、場合によっては思っていたこととは反対の方向に働き、自然保護地域でのさまざまな活動に悪影響を及ぼす可能性もあるのだ。

2.　知床の世界遺産登録

〈2･1〉　知床観光の成り立ち

知床は１９６４年に国立公園となってから、美しい景観とその原生的な自然をもとめて全国から多くの観光客で賑わう観光地となった。特に森繁久彌主演の映画「地の涯に生きるもの」のヒットは知床観光のブームに火をつけ、さらに撮影の際に氏が作ったという歌「知床旅情」を加藤登紀子氏が歌ったことにより空前のヒットとなり、観光地としての地位は確固たるものとなった。その後も「カニ族」と言われる個人旅行者や、団体バスツアーなど、時代に応じてさまざまな旅行スタイルで楽しまれる観光地となり、世界遺産登録を迎えた２００５年には最高で年間１７０万人の入り込みとなったが、景気の低迷や東日本大震災などの影響もあり近年では総入り込み数自体は減少している。

〈2･2〉　自然保護の流れ

このような状況の中、斜里町はイギリスのナショナルトラスト運動にならい、乱開発が予想された開拓跡地の保全・原生林再生をめざし当時の斜里町長、藤谷豊氏が「知床１００平方メートル運動」を発表した。観光客などから寄付を募り植樹や野生動物管理に役立てようとする運動で、キャッチフレーズは「しれとこで夢を買いませんか」というものだ。

その後、１９８６年頃林野庁による知床国立公園内での森林伐採の問題で、全国を巻き込んでの反対運動が繰り広げられた。知床自然保護協会から協力を要請された北海道自然保護連合やジャーナリズムなどの動きにより運動は加熱し、一部で伐採は行われたものの「知床＝自然保護」という印象は当時の国民に深く刻まれたと言ってよい。当時、地元で運動を引っ張っていた午来昌氏が町長として当選し、その後５期２０年に渡り町政を担ったこともあり「自然保護行政」とも言われる斜里町のアイデンティティが築かれ現在に至っている。

〈2･3〉　世界遺産前夜

知床の世界自然遺産化への動きは地元の観光業者の間から起こったと誤解されている節もある。しかし、実際には午来町長や自然保護行政を担う一部の行政担当者などの働きかけによって始まったと言ってもよい（環境省や政治家などのリーダーシップによるものであると言われるなど、実際には誰が何の目的で知床の世界自然遺産登録化を提唱し始めたのかはわからないままである）。午来町長によれば１９９３年頃より隣町の羅臼町と研究を開始し、１９９８年より世界遺産登録のための予算が両町で計上されたとされる。一方、観光業者は、自治体や環境省などが主催する世界遺産地域連絡会議などに参加し議論をしてきたとは言え、積極的主体的に遺産登録をすすめてきたとは言えず、むしろ慎重論も多く見受けられた。

〈2･4〉　世界遺産登録当時

そのような中、地元斜里町・羅臼町での「知床世界自然遺産候補地地域連絡会議」等により、遺産登録の推薦に必要な管理計画を環境省等は策定し、2003年日本政府が知床を世界遺産物件としてユネスコに推薦することを決定し、翌年ユネスコに対して推薦状を提出した。2004年７月にIUCNによる実地調査を経て、翌年、世界自然遺産として正式に登録される。

登録が近付くにつれ、メディアなどで知床の話題が取り上げられ、観光客数は増加していった。ただし、知床は世界自然遺産登録前より人気の観光地として成熟した市場となっており、宿泊施設などのキャパシティもあり、人数ベースでは世界遺産登録前年の約１５５万人に対して登録年で約１７３万人、登録２～３年前が約１６０万～１６５万人入り込みだったことを考えると、特筆するほどの増加とは言えないだろう。一方で、道内客や日帰り客が増えており、データでは顕著には現れないが土日休日やお盆などに観光客が集中する傾向については、当時事業を行っていた筆者の経験からも明らかである。なお、土日や休日を中心にキャパシティをオーバーした観光客の主な宿泊先は、知床観光の拠点であるウトロから離れた斜里町市街地や、清里、網走、川湯などに分散することとなり、特に清里や網走など、体験型観光施設などを中心にその後の観光展開の足がかりを作った例が見受けられた。

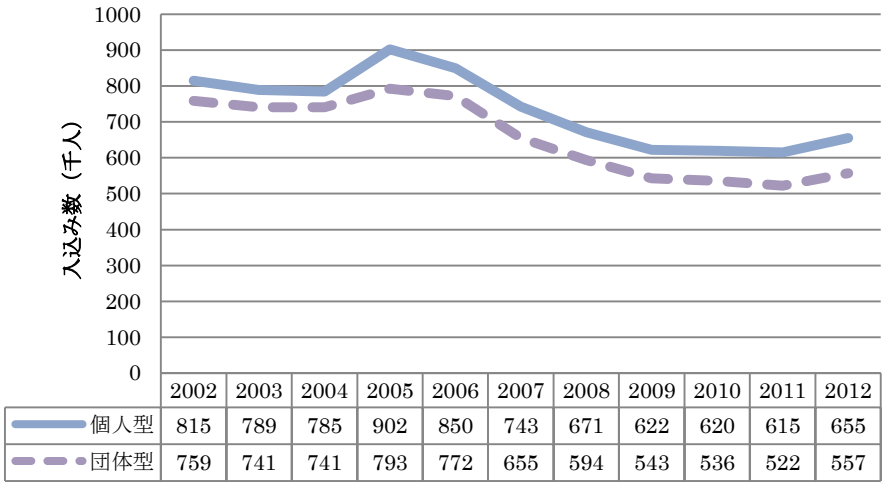
〈2･5〉　世界遺産登録後

登録当時の一時的なさまざまな混乱から、遺産登録直後は旅行会社などが知床をディスティネーションとして避ける傾向などが見られたが、それ以上にリーマンショックなどの景気低迷の煽りを受け国内観光の需要が極端に悪化し、知床の入り込みも減っている。さらに、東日本大震災や福島原発の事故を受け、国内外の観光市場が冷え込み、若干の回復傾向は見られるものの現在に至っている。

３．　世界遺産登録による観光スタイルの変容

さて、知床の世界自然遺産化を受けて旅行者の旅行スタイルには明らかに変化が見られた。

まず注目していただきたいのは知床斜里町観光協会調べによる登録前後の入り込みの状況である。全体の入り込み数は、先述の通り、遺産登録前年の約１５５万人に対して登録年で約１７３万人、登録２～３年前は約１６０万～１６５万人入り込みがあったことを考えると、特筆するほどの変化があったとは言えない。さらに言えば、遺産登録の７年前の１９９８年には１８０万人を越える入り込みを記録しており、入り込み数自体は知床地区ではかつてに経験していたものよりも、むしろ少なかったと言えるほどである。古くからの観光業者の中には「昔はこんなもんじゃなかった」と言う人もいるほどである。しかし、筆者自身も事業を営んでいたものとしてデータでは現れない、以前からとは違った印象を持っていたのである。それは、道内客やレンタカーなどを利用した個人客が、土日祝日に極端に集中していたことにより、集客ピーク期の機会損失が著しかったことである。



	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
個人型	815	789	785	902	850	743	671	622	620	615	655
団体型	759	741	741	793	772	655	594	543	536	522	557

グラフ１　知床世界自然遺産化と観光形態変化

グラフ１を見ていただきたい。これは過去１０年程度の個人客と団体客の推移を、先述の知床斜里超観光協会のデータから、貸し切り観光バスとマイカー・レンタカーなどの移動手段から導きだしたものである。これを見ると、世界遺産登録となった２００５年、団体客の伸びに対して一気に個人客の数が増えていることに気がつくだろう。世界遺産登録前年の２００４年と２００５年の伸び幅を比較すると、団体型観光が７%の増加に対して、個人型観光はその倍の実に１５％も伸びていることとなる。人数ベースで見ると、団体観光の５万人増に対して、個人観光客１２万人も増えており、これは知床地区で冬に行われる「オーロラファンタジーショー」の一冬の来場者数に匹敵する、地域の経済にとって大きな変化であったといえる。

４．　個人型観光は「エコ」か？

〈4-1〉　個人型観光が伸びた要因

世界遺産登録に伴ってなぜこうも急に個人型観光が伸びたかについては定かではないが、事業を行っていた当時の客からの聞き取り等で次のような要因が挙げられると考えられる。

ひとつは、これまで知床の観光には関心のなかった層が、世界遺産化の話題から旅に出かけたケースが多く見受けられ、特にマイカーで訪れることのできる道内客が増えたことだ。これは観光協会の調査からも読み取ることができ、そもそもエスコート型の団体ツアーを購入する必要性のない層が大幅に増えたと考えられる。

次に、インターネット技術などの普及により、ブーム期の観光客の宿泊等の予約作業が以前と比べ容易なものとなり、早くからホテルなどに予約が入り、物理的に団体客に部屋を割く余裕がなかったというものである。また、観光業者にとっても団体旅行に部屋や航空機の座席を販売するよりも、個人客に販売した方が一般的に高価となり利益が出やすい。ホテルなどは積極的に個人客に優先的に販売することが当然の流れとなり、結果的に団体ツアーの商品設定自体が減ったことも事実である。

さらに、「団体型から個人型へ」という時代の流れがある。これには、かつてよりドライブインやお土産物屋を中心に巡る従来型のバスツアーへの嫌悪感から、個人化に向けた過度な取り組みも見られが。実際、環境省などが主導した「知床エコツーリズム推進協議会」などでの検討内容を見ると、「個人型観光の拡大」という項目も見られ、世界遺産化により極端に個人型観光を煽動したことは否めない。

〈4-2〉　個人型観光の弊害

個人型観光が増えることによってどのようなことが起こったか。それは、とりもなおさず土日やお盆など連休への観光客の集中と、それに伴うサービス低下及び機会損失である。団体バスやそれに応じた大型ホテルによる、大量送客型マスツーリズムの弊害を唱える人は多いが、ゴールデンウィークから紅葉シーズンまでの半年足らずに年間の６割以上を売り上げなければならない地域にとって、ピークが集中するということは、ピークに合わせ受け入れ体制を大きくしなければ収益が伸びない。そうして、北海道の大型ホテル旅館などが成長し、それにつれ大量送客型の団体型マスツーリズムが定着していった。しかし、皮肉にも、世界遺産化による個人観光客の伸張は、マスツーリズムの時代の論理と同じことが引き起こされ、実際に知床でも新たなホテルの建築がなされ部屋数が増えた。なお、大型ホテルは２軒が進出を検討し、１軒は世界遺産登録以降の観光客数の伸びがそれほど顕著ではないことを見てホテル建築を断念、もう１軒は５０部屋規模のホテルを建築したが、登録後の客数の落ち込みに苦労した。このように、ウトロ地区のホテルは１軒増加したが、その後、１軒が廃業している。

世界遺産化を受けてショルダーシーズンも個人客の殺到する土日を絡めた商品設定が難しくなることにより、事実上旅行会社などによる団体型観光商品は減り、地元観光業者は個人型旅行客に焦点を絞らざるを得なくなっていったのである。

これに伴い、地域業者にとってはトップシーズンの余剰な雇用、支出が増え、トップシーズンは施設の規模に応じて収入が頭打ちとなるばかりか、ショルダーシーズンの収益補填もままならないまま、特にホテルなどを中心に厳しい経営環境に追いやられた。また、年間にするとわずか数日のために交通渋滞や、遊歩道混雑対策の整備などを行わなければならなかったり、ゴミの処理などの一時的な負担が増えたりと、一見エコなツアーの個人型観光客が増えることによる対応に追われる結果となったのである。その際のトップシーズンの機会損失は計り知れない。トップシーズンに充分に楽しめなかった経験が、観光客の印象を悪くしていることなども勘案すると、世界遺産化当時の個人型観光の隆盛は目に見えないコストを地元に押し付けており、エコロジーの面でもエコノミーの面でもマイナスとなっていると言わざるを得ない。

このようなことを避けるために、知床の観光業者や旅行会社などは、世界遺産化と関係なく、トップシーズンと閑散期の料金設定を変えたり、団体料金を設けたりなど、年間の集客の標準化を目指してきた長い歴史があった。具体的には、５～６月や１０月の閑散期からピークに向かうショルダーシーズンに団体ツアー設定を増やし、７～８月といったピークには団体ツアー設定を手控え、年間を通して極端なピークを避ける工夫がされてきたのである。世界遺産登録当時は筆者が始めたガイドサービスも定着しつつあったが、それは世界遺産化を睨んでの事業化ではなく、純粋に知床地域に足りないサービスが自然発生的に生まれたと言っても過言ではない。

５．　まとめ

図１　少人数で自然を楽しむエコツアー

図１のような、筆者が事業として行っていたエコツーリズムは、ガイドが案内する少人数型の旅行形態である。また我々は、顧客の対象として個人型観光客を歓迎していたが、同時に団体型バスツアーの顧客に対しても少人数グループ分けするなどして対応していた。ガイドツアーをしている最中の「見た目」はガイド一人に対して最大で１０人程度の小グループであり、そのような姿は「エコであるもの」としてメディアや研究者などに取り上げられることも少なくなかった。そこで筆者が申し上げたいことは、観光地での「最終的な旅のカタチ」を見てエコかエコではないかを語ることは、実際のところあまり意味がないということである。自然や文化、習俗などを保全しながら、観光による地域振興を目指すエコツーリズムの議論においては、「最終的な旅のカタチ」を見て観光全体を語るのではなく、地域振興に寄与するツーリズム全体のあり方を経済、政策、環境配慮など多角的に検討するべきである。そうすることによって例えば、次のような議論に深みが生まれるのではないだろうか。

・団体ツアーであっても地産地消に寄与する着地型観光の仕組みづくり。
・発地型旅行会社の主催旅行に対する環境保全に資する基金制度の検討。
・ITC 等を活用した広域混雑回避システムの構築。
・従来より自然発生的に定着していたショルダーシーズンへの誘導。
・トップシーズンと閑散期の集金、雇用、その他の、大きなシーズナリティを、地域がより戦略的に対応する仕組みの検討。例えば、公務員と民間のワークシェアなど。
・大型観光地でのガイド人数や事業者数の戦略的な確保。

他にも、いくつか対策が考えられるが、とりわけ体験メニューや観光まちづくりに偏った現在の観光学は、先ほどから申し上げている「最終的な旅のカタチ」にとらわれたものと感じる。観光学の研究が、「最終的な旅のカタチ」「見た目」といった表面的な考察だけではなく、流通の現実をとらえたところに立脚した観光産業の振興や、それらをサポートする行政のあり方などへの提言に寄与するよう発展すること願いたい。

【参考文献】

藤崎達也　2012 年「観光ガイド事業入門」　　学芸出版社
斜里町経済部商工観光課観光統計資料　2005 年～2013 年
宇仁義和　1994 年「知床伐採問題その後－７年前の騒動はいったい何だったのかー」ＲＩＳＥ，４：42-43.
ギミック
午来昌　2007 年　「大地の遺産―知床からのメッセージ」　響文社
環境省知床データセンター　エコツーリズム推進協議会資料

（ 2013年9月11日受理 ）